



青春の思い出

17年卒業 鈴木きみ

今までの私の人生をふり返ってみて沁々と幸せに思うこと、それは私の人生が私なりに「生きた！」という実感に溢れている事でした。

勿論時代も変り苦勞もありましたが不思議と幾つかの幸運にも恵まれ、明るく元気に生きる事ができました。

その第一番目の幸運

が、今から六十年前当時の府立第六高女に通う同い年の従姉妹の言葉でした。「きみちゃん、私の学校に夜学があるわよ。」私とはび上って喜びました。というのも私が小学校六年生の時、父が株で大失敗し、折角合格した府立第一高女に入らず高等小学校に通っていたからです。その後順調に夜

学の第六高女に進み師範を出て、私の夢である小学校の先生になる事ができました。

夜学の三年間は私の青春時代の夜明け。素晴らしい外国映画も見始め沢山の思い出に溢れていました。

でも一番鮮明なのは、たった一年間だけの担任だった大好きな真田文子先生の思い出です。

先生は静かで、どこかさりっとした感じの中にも温みが溢れていました。ある日家庭科の時間

私のミシンの具合が悪くなり先生が直してくださいました。

私は先生のおそばで終始先生の息吹きを身近に感じながら立ち続けていました。そのほんの僅かな空間に、先生と私だけの世界がありました。あの時の体一杯に感じた幸福感は一忘れぬ事ができません。沢山の思い出と希望を与えてくださった夜学の三田高校に心から感謝の気持ちを送らせて頂きます。



感謝！

38年卒業 立石節子

「きつと、オセンチ山にパセリが生えているんだわ。」給食のパセリを眺めながら、よくポヤいたものだった。その独特の香りと味は、食べ慣れない者にとって洋食のお飾りのように思い、敬遠気味だった。そのような生徒にかなり厳しくしつつ、こく食、食べるように注意された。

今、いつもパセリを食卓に載せながら懐かしい思いに駆られる。

私が三田高に入った一番の目的は給食にあった。他の都立校を病気退学し、医師から三年間は結核が再発するので夜学へは行かないようにと言われ、会社もしばらく休職した。

そのような私にとつて、栄養豊かな給食と、校医の健康講話は、仕事

と勉学を両立させる上で、不可欠のものだった。そして、三年間の勉学のブランクは、どの科目も好奇心いっぱいなのたのしい授業にしてくれた。更に、当時超一流の教師陣にお教えを受けたことは幸せだった。

今、大学に出講している基が、高校で築かれたと感謝の念でいっぱい！亭主から「おまえは趣味で学問をしている。」と皮肉られつつ、外見は、亀のような歩み（本人は大車輪の人生だったと思っている。）をたのしんでいる。



還暦も過ぎて

32年卒業 岩田かほる

三田高校を卒業して41年、昨年10年11月7日32年卒業の同期会が催され、皆還暦を迎えられた同志が顔を合わせる事が出来うれしく思っています。その欠先に、この原稿の依頼で懐しさの余りついお引き受けしてしまいました。

当時は、社会もようやくテレビの登場で、社会情勢を目で耳で知ることが出来る時代に入っていました。しかし私達は若さと、純粹で真摯に人生と

は何？、ある先生は、富士山に登る様なもの、一生が勉強なのだよと云われ、遙か遠くを夢みながら、学校での記憶をたどっていくと今はなき講堂で、全学生が一堂に会して歌った、ダットン人の踊りや、火の鳥をN響の方の伴奏で、鈴木先生のタクトで歌ったあの声は抑圧されていた心をはねのけて、強く生きることが学んだのではないかと思っています。

運動会に、バレーボール大会と昼は働いていて

も夜、学校に来てしまえば学生になり、学んだことはたったの四年間であっても最も感受性の強い時を過したことは、心に試みて残っています。現在は、精神的健康のための趣味としてコーラスに読書会に、又、社会参加の名目で、狛江市の福祉協議会の評議員と、明るく選挙推進協議会委員をしており、選挙に対しての啓発活動を行っております。

自発的とはいきませんが、それでも人との交流を図りながら私なりの生き方をしていることと思っております。



新しい挑戦と私の原点

39年卒業 竹上 勝

昭和三十四年、十六歳で単身鹿児島県から上京、目的は高校進学でした。

その私を育ててくれたのが三田高等学校でした。青春多感であった私が曲りなりにも社会人として世に出ることができたのは、三田高校時代の先生方や級友の皆さん方の励ましに尽きると思っております。

何を為すにも、あの時代を振り返れば恐れるものはありません。

二十八歳で大学を卒業し、ビジネスの世界に身を投じました。

昨年六月まで、在日外資系日本人のトップとして、壮烈なビジネス社会の最前線に身を置いておりました。現在の日本のビジネス社会は、百年に一度ともいえるべき転換

期を迎えております。

企業競争のグローバル化、IT（インフォメーション・テクノロジー）革命の進展、経済のソフト化・サービス化は、働く人々に価値観の転換をせまり、企業間・産業界の人の流動化を恐ろしい勢いで促進しております。

企業は終身雇用を放棄せざるをえず、企業に働くビジネスマンは自らの責任で生涯のキャリアプランを築く時代にはいつてもまいりました。

私は昨年六月に、五十五歳を節目に会社を退職し、ビジネス・キャリア

のコンサルタントとして本年三月独立いたしました。

一人で創業すること、思ったよりも大変な毎日ですが、三田校時代の原点に、何も恐れることなく、転換期に生きるビジネスマンのお役に立つてまいりたいと念願しております。

